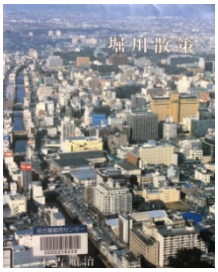
堀川散策



写真は末吉順吉『堀川散策』1987 年、朝日新聞名古屋本社。関心あるテーマなので紹介したい。なお、写真下は名古屋都市センターに展示されていた江戸時代の宮宿、「宮船着春景」。

堀川は開削された当時から、明治 22 年 10 月 1 日の名古屋市制の施行まで、北部と南部に区分できます。それは名古屋遷府の際、城下の町域は堀川上流の堀留から佐屋街道沿いの尾頭橋までで、ここから下流域は、熱田神宮の門前町として古くから栄えていた熱田（宮）だったからです。このことから、尾頭橋より北を北部の名古屋、南を南部の熱田（宮）に区分できるのです。

藩政時代、名古屋城下町の人々の生活物資や各種の資材は熱田（宮）から堀川を逆上って運ばれていました。このため遷府の頃、名古屋へ移住してきた商人達は、こぞって水運の利用できる堀川端へ住居や蔵を構えたのでした。堀川西岸には主に清須越しの商人が米・塩・みそ・しょう油・干鰯・油・かわら・乾物などを商い、主に城下町の食料品の調達を行っていました。東岸には清須や京都から越してきた材木関係の仕事に従事する人が多く、‥‥　尾頭橋から熱田にかけては、住吉橋の北東岸に航海の安全を祈願した住吉神社が祭られ、藩政時代、堀川を利用した水運が盛んになった頃、大阪の住吉神社から回船問屋が移したものといわれています。住吉橋南東岸の高台には、名古屋三景のひとつに数えられた妙安寺があり、ここからの西南の眺望はよく、創建当時の寛文 9 年（1669 年）以降文人墨客の来遊が多く、芭蕉が「此海に草鞋すてん笠しぐれ」と詠んだ時雨塚が現在も残っています。

ここより南方にかけて、蔵屋敷などがあり、尾張藩の御材木場が置かれた白鳥へと続きます。御材木場には木曽のヒノキや飛騨の山々から切り出された材木が貯蔵され、ここに御材木奉行が置かれていました。対岸（西側）には堀川開削のとき、資材置き場にし、船の出入りの用をなした太夫堀（後の白鳥貯木場）があり、隣接地の南側には、尾張藩の藩船を係留する御船蔵がありました。また、ここから南東方面に魚市場として古くから栄えた熱田神戸町・木の免町があり、さらに名古屋台地（熱田台地）の最南端に、江戸時代になって整備された東海道五十三次のひとつ「七里の渡し（宮の渡し）」があり、大勢の旅人で賑わっていました。七里の渡しの南面には「保田の海」（現伊勢湾）がひらけていたのです。

（2017 年 12 月 28 日）